山梨大学教育学部附属中学校 第３学年社会科　学習指導案

授業者　　進藤　秀俊

１　単元名　　「日本の近代」

２　単元について

（１）生徒観

本学級は、学習に前向きに取り組もうとする生徒が多い。中学３年生ということもあり、中学校卒業後の進路の実現と学校での学びを結びつけ、その意義を見出している。提示した課題に対しても、真摯に取り組む姿が見られ、ほぼ毎回すべての生徒が期限までに提出している。年度当初は緊張している生徒も多く、学級内での交流活動に消極的な場面も見られたが、最近では学級内の人間関係も徐々に深まり、ペア学習やグループ学習に対して積極的に取り組める生徒が多くなった。

一方で、既習事項を活用して自分なりに解答を出すことが求められる学習課題に苦手意識をもつ生徒が多い。原因としては、何をどのように活用すればよいか分からない、自らの解答をどのように表現すればよいか分からないなど、学び方が身についていないことが考えられる。また、それにともなって自らの意見に自信がなく、ペアやグループで何か一つの意見を作り出したり、互いの意見を交流したりする活動では消極的になってしまう生徒が少なからずいる。さらに、与えられた学習課題や得られた学びから新たな疑問や関心をもち、さらに探究する姿があまり見られず、「主体的な学び」の実現に向けて改善すべき課題となっている。

これらの課題を改善するためには、生徒のもつ良さを活かし、学級の仲間同士で学習課題への取り組み方について共有したり、教え合ったりすることが有効であると考える。また、生徒の関心を引き出し、さらに問いを生み出すような教材や指導の工夫も必要であると考える。本単元においては、「主体的な学び」のプロセスモデルに基づいた授業を展開する中で、それらを実現し、生徒の課題の改善につなげていきたい。

（２）教材観

本単元は、学習指導要領Ｃ（１）「近代の日本と世界」に基づき、歴史的分野目標（１）の「各時代の特色を踏まえて理解すること」を踏まえて設定した特設単元である。この中項目では、「19 世紀ごろから 20 世紀前半までの我が国の歴史を扱い、我が国の近代の特色を、18 世紀ごろからの世界の動きとの関連を踏まえて課題を追究したり解決したりする活動を通して学習すること」をねらいとしている。

坂野潤治は、日本の近代には６つの段階があるとし、それぞれの段階を端的に表現する固有名詞とともに示している。「改革期」（公武合体）、「革命期」（尊王倒幕）、「建設期」（殖産興業）、「運用期」（明治立憲制）、「再編期」（大正デモクラシー）、「危機期」（昭和ファシズム）、「崩壊期」（大政翼賛会）である。（坂野、2012）

日本の近代は、欧米諸国のアジアへの進出などの複雑な国際情勢を背景としながら、政治から経済、社会、生活・文化に至るまでが急激に大きく変化した時代である。「改革期」は、アヘン戦争やペリーの来航、安政の五カ国条約の締結などを背景に、国内が「尊王」か「佐幕」か、「攘夷」か「開国」かで二分された。「革命期」には、江戸幕府が倒され、新しい国の仕組みがつくられた。「建設期」には、富国強兵策が実行されるとともに、他国との外交を展開して国境を定めたり、議会の開設を求める自由民権運動が始まったりするなどして近代国家の形成が目指された。「運用期」には、大日本帝国憲法が発布され、国会が開設されてアジアで唯一立憲政・議会政治が行われるようになった。「再編期」には、日清戦争から日露戦争を経て、産業革命や条約改正を成し遂げ、日本が帝国主義国としての意識をもつようなった。この時期には護憲運動が起こり、政党の力が大きくなった。また、第一次世界大戦の影響を受け、日本経済が急激に成長した時期でもある。普通選挙が実現し、社会運動も高まっていった。「危機期」になると、恐慌が重なり、日本は不景気に陥った。行き詰まった政党政治への信頼が失われ、軍部が力をもつようになった。これは五・一五事件、二・二六事件によって決定的となった。軍部の一部は勝手に満州に進出し、それをきっかけに日本は国際的に孤立していった。「崩壊期」では、日中戦争

に突入し、第二次世界大戦、太平洋戦争を戦い、敗戦の日を迎えた。

本単元は、大正時代までの学習を終えた後に位置づけ、既習事項をもとにして、日本の近代の歴史を多面的・多角的に捉えさせる学習を行う。日本の近代の歴史は、様々な事象や人物が複雑に関連し合いながら展開した時代である。そのため、「多面的・多角的に時代を大観する学習」の教材として適切であると考える。

また、およそ 150 年にわたった日本の近代全体を、初めから大観し、その時代像をつかむことは中学生には困難である。そこで、本単元を設定し、近代を 2 つに分けて捉えさせ、より深く時代像を考えさせたい。上に述べたとおり、「再編期」までの近代の歴史は、日本という国が新しく形作られ、列強諸国に肩を並べるという意味で発展をしていった歴史と捉えることができる。一方で、「危機期」以降の近代の歴史は、外国との対立の激化、経済の悪化の中で、形作られてきた日本が崩れ、また新たな国づくりへと向かう歴史であるといえる。日本の近代の流れが変わる「再編期」の学習の後で一度大観させておくことが適切であると考え、本単元を位置づけた。

（3）指導観

本単元は、大単元「日本の近現代」の一部としての設定されている。日本の近代と現代の歴史はつながりが強く、1 つの大単元としてくくり、相互に関連させて学習させることで、原因や結果、影響などをより深く理解させることができると考えた。また、大単元を貫く問いとして、「日本の近代とはどのような時代であったか、またそれは現代にどのような影響を与えたのか」を立て、単元の学習を終えるごとに、問いに答えさせることとした。それによって、各単元の位置づけが明確になり、大単元全体で「主体的な学び」のプロセスモデルを実現できると考えた。さらに、近代の歴史を踏まえて、現代の歴史を捉えるだけでなく、現代の歴史を学んだ後で近代の歴史を振り返り、再評価する学習活動を仕組むことができ、生徒のより深い理解につなげられると考えた。ちなみに、「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」では、学習指導要領の中項目をいくつかつなげた形で単元を設定し（本実践においては大単元）、「技能」や「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の評価場面を精選することが想定されている。

本単元の指導においては、自分なりの視点をもって日本の近代を捉えられるよう、学級全体として「歴史を学び、自分なりの時代像を考える際の視点」を考案し、「歴史の目」と名付けて共有することとした。これについては、前単元までの学習において、単元終末の授業に生徒たちに学習した歴史を振り返らせ、その時代像を述べさせる活動を仕組んだ。その時代像を捉える際の「考え方」を出し合い、共通する点を整理する中で少しずつ練り上げていった。共有した「歴史の目」を選択して、日本の近代を説明させる形にすることで、生徒観で述べたような課題の改善に近づけたり、生徒同士が互いの意見を理解しやすくしたりすることができると考えた。これは、一昨年度まで本校社会科で取り組んでいた「教科ならではの見方・考え方」についての研究の成果を活かしたものである。本単元までの学習において生徒ともに考案した「歴史の目」は、次の表の通りである。

表「歴史の目＝歴史的分野の学習における『考え方』」

考え方	内容
時系列	「時系列」に並べ、そのつながりを見て考える。
変化と継続	「変化」や「継続」に着目して考える。
比較	２つ以上のものを「比較」して考える。
関連、原因・結果や影響	２つ以上のものを関連づけて考える。
大きな流れを見る	時代の大きな流れに着目して考える。
転換点	各時代の「転換点」となる事象に着目して考える。
複数の立場	複数の立場に着目して考える。
多面的	事象をいくつかの側面に着目して考える。
現代と結びつける	現代の世界や日本と結びつけて考える。

３　全体研究・教科研究との関わり

（１）本単元における「主体的な学び」の姿　※（　）内は「主体的な学び」のプロセスモデルの学習過程

本単元では、「主体的な学び」のプロセスモデルをもとに、「日本の近代」像を自分で選択した「歴史の目」に基づいて考えさせる学習を行う。前単元までの学習内容を踏まえて、自分なりに「日本の近代」像を考えさせた上で、その時代像をより高いレベルのものにするという目標を設定させるところから単元の学習を始める。（目標設定）「日本の近代」像を考える手立てとして、学級で共有したものの中から１つ「歴史の目」を選択させる。（方略計画）続けて、さまざまな「歴史の目」を活用して、実際に「日本の近代」像を考え、より適切な「歴史の目」を探る学習を繰り返し行う。（遂行・振り返り）単元末には、各自で「歴史の目」を選択させ、「日本の近代」像を自分なりに考えさせるとともに、他者との交流などを通して自らの考えを深めさせ、「日本の近代」をより効果的に説明することができる「歴史の目」を改めて選択させる。（振り返り・方略調整）単元末には、自らの「学び方」を振り返らせ、その成果と課題を次の単元の学習に活かさせる指導を行う。（全体の振り返り）

本校社会科では、「社会における諸課題に向き合い，主体的に解決しようとする生徒の育成」を目指している。「主体的に解決しようとする」とは、「課題」に対して「自分事」として捉え、解決に向かって、自らの考えや学びを振り返り、視点や方法を工夫しながら考察したり、構想したりすることである。これは、「主体的な学び」のプロセスモデルの「振り返り・方略調整」の学習過程に当てはまるものである。また、昨年度までの実践において、教科研究会などで多くいただいたご意見が、「主体的な学び」のプロセスモデルの「方略調整」を生徒自身が行えるようにする工夫がもっと必要なのではないかという点であった。以上のことから、本単元ではとくに「方略調整」に重点を置いて授業を仕組みたい。

（２）本単元における「主体的に学習に取り組む態度」の評価

全体総論で示された「『主体的に学習に取り組む態度』の評価の枠組み」に基づき、評価規準を定めた。具体的には、単元の「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準を「よりよい社会の実現を視野に「歴史の目」を取捨選択しながら「日本の近代」像を追究しようとしている。」を「おおむね満足している」状況（Ｂ）とした。また、「十分満足できる」状況（Ａ）については、生徒が実現している学習の状況が質的な高まりや深まりをもっていると判断される時であり、多様な状況が考えられる。また、「努力を要する」状況（Ｃ）の生徒に対しては、「考え方」の選択方法などについてフィードバックしたり、学級内の他の生徒の意見を紹介したりしたい。

本単元では、上述の通り「方略調整」に重点を置いているため、「歴史の目」を選択し、「日本の近代」像を自分なりに考える場面における「主体的な学習に取り組む態度」の評価（第７時）を「評定に用いる評価」として扱う。また、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校社会』において、「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、「自らの学習状況を把握し，学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら，学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価することが重要である。」と示されていることから、「全体の振り返り」にあたる単元終末の授業における生徒の振り返り場面の評価（第８時）も「評定に用いる評価」として扱う。

「主体的な学び」を表出させる手段としては、ワークシートを活用する。具体的には、生徒が「日本の近代」像を考える過程において、どのように「歴史の目」を取捨選択したのか、またなぜその「歴史の目」を選択したのか記述させる。また、毎時間の振り返りと単元全体の振り返りを記述できるワークシートを用意し、単元終末の授業後に、「粘り強く学習に取り組む」側面と「自己調整しながら学ぶ」側面に関わる学習状況について記述させる。

（３）本単元における「社会における諸課題」に向き合うこと

本校社会科では、歴史的分野において「社会における諸課題に向き合う」とは、（ⅰ）現代の世界や日本、地域に見られる諸課題との関わりの中で歴史的事象を捉えること、（ⅱ）歴史の授業で学ぶ各時代において課題と

なっていたことを捉え、学びに向かうことであると考えている。

本単元が含まれる大単元を貫く問いでは、「近代と現代との関わり」について考えることになる。そのため、本単元においては、（ｉ）であると考える。現代の歴史には、中学校ではまだ学習していない段階であるが、小学校での既習事項や地理的分野の学習を通して、現代の日本についての知識は一定程度もっているはずなので、それらを活かしながら「日本の近代」の歴史を捉えさせたい。

４　単元の指導目標

（１）欧米における近代社会の成立とアジアの諸国の動き、明治維新と近代国家の形成、議会政治の始まりと国際社会との関わり、近代産業の発展と近代文学の形成、第一次世界大戦前後の国際情勢と大衆の出現などを基に近代の特色を理解することができる。【知識及び技能】

（２）近代の日本と世界を大観して、「歴史の目」を選択し、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現することができる。【思考力、判断力、表現力等】

（３）よりよい社会の実現を視野に、「歴史の目」を取捨選択しながら、「日本の近代」像を追究することができる。【学びに向かう力、人間性等】

５　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
欧米における近代社会の成立とアジアの諸国の動き、明治維新と近代国家の形成、議会政治の始まりと国際社会との関わり、近代産業の発展と近代文学の形成、第一次世界大戦前後の国際情勢と大衆の出現などを基に近代の特色を理解している。	近代の日本と世界を大観して、工業化の進展と政治や社会の変化、明治政府の諸改革の目的、議会政治や外交の展開、近代化がもたらした文化への影響、経済の変化の政治への影響、戦争に向かう時期の社会や生活の変化、世界の動きと我が国との関連などに着目して、事象を相互に関連づけるなどして、近代の特色を多面的・多角的に考察し、表現している。	近代の日本像について、よりよい社会の実現を視野に、仲間と交流したり、自己と対話したりしながら、学習課題を解決しようとしている。

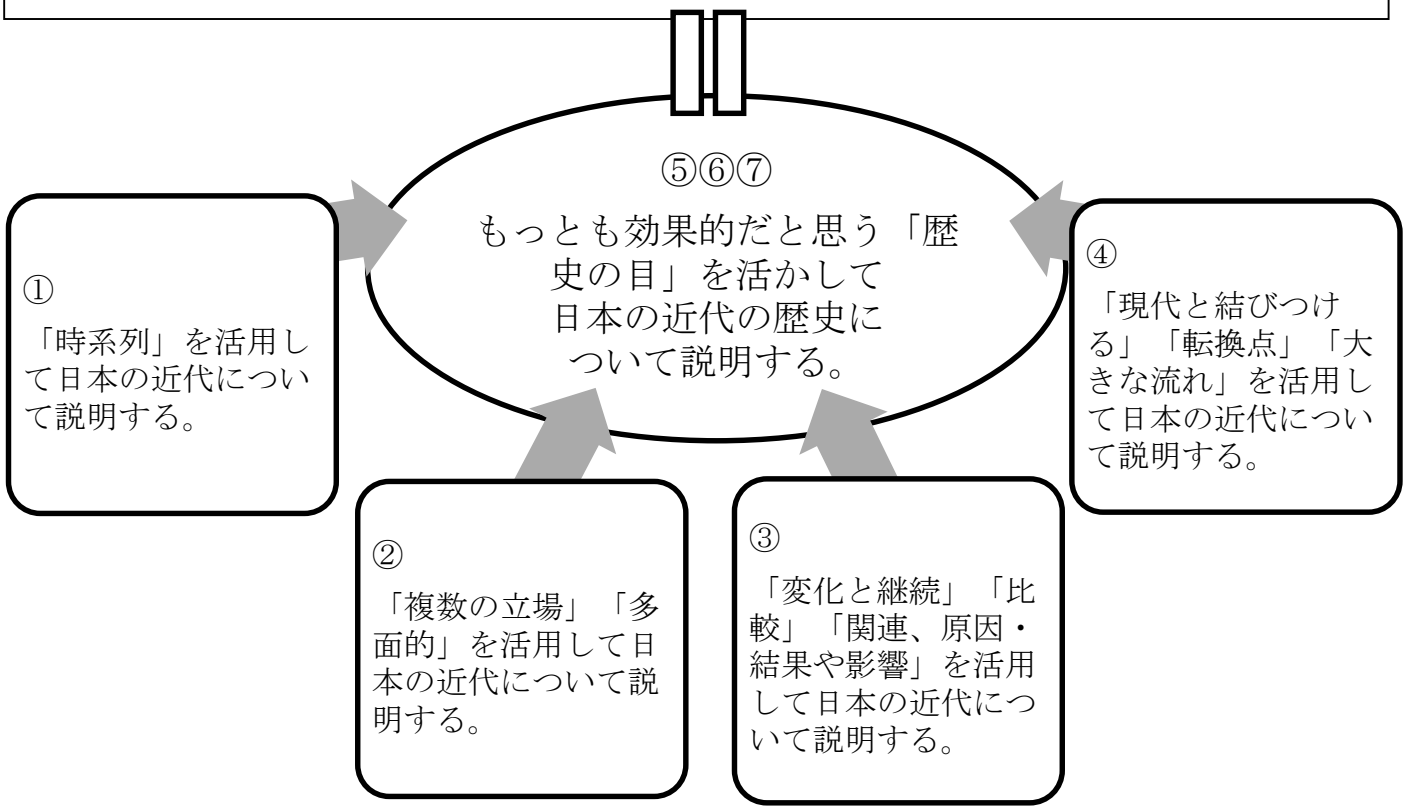
6　単元の構想図（学習内容と問いの整理）　※数字は次数

《前単元までの学習内容と問い》

学習内容	単元を貫く問い	キーワード
明治維新	明治の諸改革は、本当に維新だったのか。	富国強兵、殖産興業
近代国家への歩み	明治政府の目指した国家像とは、どのようなものだったのだろうか。	岩倉使節団、新たな外交の展開、自由民権運動、帝国憲法、立憲政
帝国主義と日本	日本は本当に一等国入りを果たしたのか。	帝国主義、条約改正、日清戦争、日英同盟、日露戦争、韓国併合、産業革命、明治期の文化
第一次世界大戦と日本	第一次世界大戦を通して、日本が得たものは何か。	第一次世界大戦、総力戦、独立運動、産業革命、大正デモクラシー、護憲運動、大戦景気、政党内閣、男子普通選挙、治安維持法、社会運動

《本単元の学習内容と問い》　※数字は時数を表す。

《単元を貫く問い》日本の近代とはどのような時代だったのだろうか。



7　単元の「指導と評価」計画（全９時間）　○…学習改善につなげる評価　●…評定に用いる評価

次数	主な学習内容	知	思	態	主体的な学びのプロセスモデル
1	これまで学習した「日本の近代の歴史」をまとめる。	○		○	【目標設定・方略計画】 ・単元の目標に沿った自分なりの目標を立てる。 ・これまでの学習の成果を活かし、「日本の近代の歴史」を説明するのに効果的な「考え方」を選択する。
2	「複数の立場」「多面的」の「歴史の目」を活かして日本の近代を説明する。		○	○	【遂行】【振り返り】 ・様々な「歴史の目」を活用して、日本の近代を説明する。 ・それぞれの「歴史の目」の良さや課題について振り返る。
3	「変化と継続」「比較」「関連、原因・結果や影響」の「歴史の目」を活かして日本の近代を説明する。		○	○	
4	「大きな流れ」「転換点」「現代と結びつける」の「歴史の目」を活かして日本の近代を説明する。		○	○	
5	「考え方」を選択し、「日本の近代の歴史」を説明する。	●	○		【遂行】 ・これまでの学習の成果を活かし、自分が効果的だと考える「歴史の目」を選択し、日本の近代を説明する。
6 本時	自分が選択した「歴史の目」を振り返り、改めて選択する。			●	【振り返り】【方略調整】 ・仲間との交流を通して、自分が選択した「歴史の目」の効果について振り返る。 ・振り返りを活かし、単元を貫く問いの解決により効果的な「歴史の目」を改めて選択する。
7	自分が選択した「歴史の目」を活用して、「日本の近代の歴史」について説明する。		●	●	【遂行】【全体の振り返り】 ・これまでの学習の成果を活かし、自分が効果的だと考える「歴史の目」を選択し、日本の近代を説明する。 ・単元の学習を通して、自らの目標達成のために努力し続けたことや工夫したことを振り返る。 ・単元の学習の成果と課題を次の学習にどのように活かすか考える。

8　本時の授業

（1）日　時　　令和３年６月 21 日（月）14：00～14：50

（2）場　所　　山梨大学教育学部附属中学校　図書室

（3）題材名　　自分が選択した「歴史の目」を振り返り、改めて選択してみよう

（4）本時の指導目標

・日本の近代について、「歴史の目」を選択・活用しながら説明することができる。

【思考力、判断力、表現力等】

・仲間との交流を通して、自分の選択を振り返り、根拠をもって改めて「歴史の目」を選択することができる。　【学びに向かう力、人間性等】

（5）展　開

	●学習内容　・学習活動	・説明や指示、支援	評価規準と評価方法
導入 ５分	●前時までの学習活動と本時の学習活動の確認	・前時までに取り組んできた学習活動と本時で取り組む学習活動の内容を確認する。	
展開１ ２０分	●意見の交流・相互評価		
	「日本の近代」を見る上で、よりよい「歴史の目」をどれだろうか？		
	・各自の意見を共有し、話し合いを通して考察を深める。【４人グループ】 ①考察を発表。（1 分 30 秒） ②発表者の考察を評価。（1 分 30 秒） ③ファシリテーターを中心に、よりよい「歴史の目」はどれか話し合いを行う。（3 分 30 秒）	・前時にまとめたものを発表する。 ※左の流れを４回繰り返す。 ※考察の内容 ①選択した「歴史の目」 ②選択した「歴史の目」を活用して説明した「日本の近代像」 ※話し合いのポイント ・評価できること ・課題に対するアドバイス ・異なる選択肢の可能性	①自らの選択した「歴史の目」を活かし、着目点を明確にしながら「日本の近代」について説明している。（活動の様子） ②仲間の意見に傾聴し、積極的にアドバイスを求めようとしている。（活動の様子、スタディ・ログ）

展開２ １０分 ５分	●交流を踏まえて、自らの考えを深める。 ・改めて「歴史の目」を選択し、選択の理由を記述する ●考えの共有 ・代表生徒に考えを発表させる。	 ・選択した「歴史の目」が授業前後で変わった生徒と変わらなかった生徒の両方をあてる。３～４名（時間次第）	 ③交流を通して考えたことを踏まえて、「歴史の目」を選択している。（ワークシート） ※授業前と同じ選択肢でも評価に影響はしない。
終末 ２分	●振り返り ・スタディ・ログに本時の学びの振り返りを行う。		

（６）本時の評価

・「歴史の目」を選択・活用して、日本の近代を多面的・多角的に説明している。　【思考・判断・表現】

・仲間との交流を通して、それぞれの「歴史の目」の良さや課題を比較しながら、単元を貫く問いの解決により効果的な「歴史の目」について粘り強く考えて選択している。　【主体的に学習に取り組む態度】

評価場面	A の例	B の姿	C への手立て
①	選択した「歴史の目」をもとに着目点を適切に設定し、これまでの学習内容を活かしながら「日本の近代」の本質について説明している。	選択した「歴史の目」をもとに着目点を適切に設定し、それに基づいてこれまでの学習内容を活用して「日本の近代」について説明している。	これまでの学習内容や「日本の近代」像の具体例を示しながら、生徒のもっているイメージや考えに沿ったものとなるようアドバイスを行う。
②	話し合いのファシリテーター役を務めたり、積極的に発言をして話し合いを深めようとしたりしている。	仲間からの意見を聞きながら、自らの考えを深めようとメモを取ったり、積極的に話し合いに参加しようとしたりしている。	机間指導を行いながら、メモを取ったり、感想を述べたりするよう促す。
③	それぞれの「歴史の目」の特性を理解・整理し、「日本の近代」像を説明するのにふさわしい「歴史の目」を選択している。	話し合いを通して考えたことをもとに、「歴史の目」を選択している。	話し合いの中で参考になった意見を思い出し、それをもとに「歴史の目」を選択するようアドバイスを行う。

（７）板書計画

・「本時の目標と活動の流れ」と「ストップウォッチ」を掲示する。

・展開２で生徒に考えを発表させる際は、実物投影機を使用し、図書室前方のテレビに生徒のワークシートを映し出す。

9　参考文献

・文部科学省（2018）『中学校学習指導要領解説 社会科編』東洋館出版社.
・国立教育政策研究所（2020）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校社会』東洋館出版社
・自己調整学習研究会編（2012）『自己調整学習―理論と実践の新たな展開へ』北大路書房
・北尾倫彦（2020）『「深い学び」の科学』図書文化社
・坂野潤治（2012）『日本近代史』筑摩書房
・坂野潤治（2018）『近代日本の構造―同盟と格差』講談社
・山内昌之、細谷雄一編著（2019）『日本近現代史講義―成功と失敗の歴史に学ぶ』中央公論新社
・山本義隆（2018）『近代日本一五〇年―科学技術総力戦体制の破綻』岩波書店
・加藤陽子（2002）『戦争の日本近現代史―東大式レッスン！征韓論から太平洋戦争まで』講談社
・三谷太一郎（2017）『日本の近代とは何であったか―問題史的考察』岩波書店